

天文民俗調査報告(2012年)

北尾 浩一*

概要

2011年に引き続いて2012年においても、日々の暮らしのなかで形成された日本古来の伝統的な星名を記録することができた。調査は極めて困難な時期を迎えているが、次のような成果を得ることができた。

・瀬戸内海地方において、プレアデス星団について、スバル、スマルのグループに属する星名とともにナナツボシという名前が伝えられていたことが明らかになった。

・野尻抱影氏著『日本星名辞典』等に掲載されていない新たな伝承を記録することができた。

科学技術は、地域社会や人間の生き方と切り離すことのできないものとなっており、地域の伝統的な星の生活知の研究は、ますます重要なものになってくるであろう。本報告の目的は、2012年においても語り伝えられている星名伝承資料を、科学教育に活用するために記録することである。

1. はじめに

1978年、新潟県佐渡郡相川町姫津(現 佐渡市)より星の伝承の調査をはじめから35年目になった。調査を実施した地域は、「関東」「東海」「近畿」「中国」「四国」「九州」である。「北海道」「東北」「甲信越」「北陸」「沖縄」の地域は、実施することができなかった。

なお、瀬戸内海地方の調査は、公益財団法人 福武財団より瀬戸内海文化研究・活動支援助成を受けて実施したものである。

2. 調査の概要

2-1. 調査方法

漁業に従事した経験を持つ高齢者(おおむね昭和10年以前の生年)を中心にインタビュー調査を行なった。最も高齢の話者は大正5年生まれ、最も若い話者は昭和27年生まれであった。

2-2. 調査地

2012年は、次の82箇所で見聞録の記録を行なうことができた。

- ・2月…千葉県鴨川市天津、太海、館山市布良
- ・3月…大分県中津市小祝、国東市国東町田深

- ・4月…大分県中津市小祝、国東市安岐町下原、杵築市守江、片野東納屋、宇佐市安心院町大、速見郡日出町大神深江、川崎、福岡県豊前市宇島、香川県観音寺市観音寺町、豊浜町姫浜、豊浜町箕浦、伊吹島、四国中央市川之江町、三島中央、寒川町、愛媛県新居浜市垣生、大島
- ・5月…岡山県笠岡市真鍋島岩坪、北木島大浦、白石島、神島外浦、香川県仲多度郡多度津町堀江、佐柳島、高見島、丸亀市御供所町、本島町小阪、広島町茂浦、広島町小手島
- ・6月…香川県三豊市詫間町詫間、粟島馬越、粟島上新田、志々島、仲多度郡多度津町堀江、広島県福山市走島、内海町横島
- ・7月…兵庫県南あわじ市福良、沼島、山口県大島郡周防大島町小松、船越、外入、佐連、東安下庄、日前、沖家室島洲崎、浮島、熊毛郡上関町祝島、上関、柳井市平郡島浦、羽仁、岩国市新港町、香川県綾歌郡宇多津町北浦
- ・8月…香川県さぬき市原、房前、山口県周南市櫛ヶ浜、大津島馬島、防府市野島、大分県中津市今津、宇佐市長洲、四日市町、安心院町大
- ・9月…香川県東かがわ市引田、坂出市与島、岩黒島、沙弥島、小豆郡土庄町小江、小江沖島、愛媛県今治市大浜町、美保町、岡村島
- ・10月…愛媛県松山市高浜町、津和地島、怒和島

*中之島科学研究所(科学教育)
kitao@kagaku-shinko.org

上怒和、興居島、広島県尾道市因島土生町箱崎区、三原市幸崎町能地、古浜

- ・11月…岡山県備前市日生町日生、頭島、大多府島
- ・12月…愛知県田原市福江町

3. 各地域の星名伝承

2012年に各地域で記録した星名伝承の概要は、以下のとおりである。

3-1. 関東

鴨川市に天文台をつくろう会の石井崇裕氏の案内で、千葉県鴨川市天津、太海、館山市布良の星名伝承及び館山市布良の「めら星」の停留所待合室の設置の経緯についての調査を実施した。

(1) 鴨川市天津

布良星は、千葉県だけでなく、北は茨城県北茨城市から分布している。この布良星の分布で不思議なことは、千葉県鴨川市浜荻で布良星が記録できるのにすぐ隣の天津で記録できないことだった。2010年8月に引き続いて調査を行なったが、サンボシ(オリオン座三つ星)及びヒツボシ(こぐま座 α 星[北極星])という星名の記録はできたものの、布良星については「聞いたことがない」という答えがかえってきた。

「サンボシ、サンボシと言っていた。3つ、星、たてに並んでいる。はすかいなって…」(話者生年、昭和7年)

(2) 鴨川市太海

2010年8月に調査を実施した話者1名(北尾 2011)に再度インタビューをしたものの新たな伝承は判明しなかった。

(3) 館山市布良

停留所待合室に布良星の解説文を書いた鈴木馨氏(昭和7年生まれ)にインタビューを行なった。鈴木氏の祖父にあたる山崎由太郎(よしたろう)氏が、マグロの布良を築き上げた創始者で江戸時代の生まれだった。しかし、鈴木氏は、漁師にはならなかった。メラボシを伝承の形で聞いたことはなかった。

「めら星」の停留所待合室は、吉田区長から提案された。しかし、吉田氏は既に亡くなられており、提案の詳細はわからなかった。

「めら星」の停留所待合室を作ったのは、会社を経営するとともにNPO活動をされている辰野方哉氏だった。辰野氏は、「めらぼし」が天文の本に掲載され、全国のプラネタリウムで語られていることを知り、布良星が大切な観光資源であり、文化であるという思いが強くなってきた。

「ところが、地元の人には布良星を知らない。地元には、こんな星が見える、と再認識してもらおうと思った」

辰野氏は、全国的に有名な布良星を地元の人がま

ず知らなければならぬと、「めら星」の停留所待合室(館山駅方面)を作ったのだった。

もうひとつ今回の調査で判明したことがある。筆者が館山駅方面の待合室にばかり気をとられている間に、調査に同行していた吉田二美氏が反対方向の白浜方面にも「めら星」の表示があることを指摘してくれた。(写真)

ところで、布良において漁師さん1名にインタビューしてメラボシを記録することができたが、伝承として伝え聞いたのではなかった。



布良のバスの停留所と待合室(館山駅方面)



布良のバスの停留所と待合室(白浜方面)

3-2. 東海

増田善久氏の案内で渥美半島の調査を実施した。愛知県田原市福江町にて漁の目標にしていたトビアガリ(明けの明星)について記録することができた。

「刺し網を朝あげに行く。3時、4時頃に刺し網をしかけて、朝あげに行く。トビアガリがあがってきた、行くか、と言って。トビアガリが出ると、すぐじきに上あがる。ひとつ。待機場場にみんなあつまって火をたいている。その人

がトビアガリと言っていた」(話者生年、昭和3年。話者は和地町出身)

3-3. 近畿

兵庫県において、次のような星名伝承を記録した。

(1) 兵庫県南あわじ市福良

大正15年生まれの前輩漁師より、冬、コノシロ漁に行ったときにマスボシさん(オリオン座三つ星と小三つ星と η 星)を目標にしたと伝え聞いていた。

「あれ、マスボシさん向いたら南や。◇菱形の部分、明るい。凧みたいに下に |、凧糸のように見えねえのがくっついてた」(話者生年、昭和27年)

小三つ星を凧糸にたとえた。

(2) 兵庫県南あわじ市沼島

繩船(なぶね)で目標にしたスマル(プレアデス星団)、サカマス(オリオン座三つ星と小三つ星と η 星)、キタニヒツ(こぐま座 α 星[北極星])等について伝えていた。

「東から出て、スマル、サカマスやとか。自分ら勝手に名前つけて。繩船用語、明治の人が言っていた」

「スマル、サカマス、時間。サカマスどれくらいなったら何時。時期でちがう。スマルは、繩をひっかけるのに使う道具に似た星。道具のスマルが星の名前になった」

「繩船、行った。ハモのノバナワ。星が相手。北極星とは言わないの。キタニヒツと言うてな。それが中心。キタニヒツは、北斗七星で探さなくてもわかる。その星が見えたらわかる。夜、山見えない。1時間も沖、勘、キタニヒツ。キタニヒツ、それさえ見えたらまちがいない。夜の海でも、キタニヒツが見えたら問題ない。だいたい方角がわかる、自分の位置わかる。曇りのときは難儀した、風とか潮とか波とかによって方角を知った」

(話者生年、昭和5年)

3-4. 中国

岡山県、広島県、山口県において、次のような星名伝承を記録した。

(1) 岡山県笠岡市白石島

スマル、クヨウボシ(プレアデス星団)、ミツボシ(オリオン座三つ星)を目標に時間を知っていた。また、三つ星が夏の土用に一日ひとつずつ登場する様子を正確に観察していた。

「星見て、土用三日、ミツボシが三つあがったら土用三日。ひとつずつ、一日ずつあがって、土用三日に、全部三つあがる。そのあがる前が、ミツボシの出る前に、クヨウボシというのが、われらはスマル、スマル。かたまつた、五寸、指いっぱい。これを基準に何時。いまあがったら何時。東の空のあがってくるのが帰る時間の目安。クヨウボシあがったら3時、ミツボシあがったら4時。ヨアケノミョージョーが5時」

「クヨウボシ言っ、スマル、スマル。漁師仲間、スマル、

スマル。かたまつて。今の子どもは、クヨウボシ。スマル、こゝらで漁師使う道具に似とるからな。スマルという蟹をとる道具に似ている。こゝもりがさ、ひっくりかえしたような。真ん中に餌おいて。蟹とるスマルに似ているから、クヨウボシをスマル、スマルと言う」

「いま、ミツボシ、スマル。そこのほうにおる。出てない。土用の入りからミツボシやクヨウボシ、スマル。ミツボシの手いっぱい上、スマルあがってる。たてに、3つ、ミツボシ。ミツボシ、明るい。ミツボシのほうが、クヨウボシよりあかい。ミツボシ、土用三日で見える。道具に似とるのがスマル」(話者生年、昭和9年)

(2) 広島県福山市内海町横島

ミツボシ(オリオン座三つ星)、ホーキボシ(プレアデス星団)、ナナツボシ(この場合は北斗七星ではない。天の川にあること、ナナツボシで川を渡ることから、はくちょう座 ζ ϵ γ δ θ ι κ ?)等の伝承が伝えられていた。

「7月7日の七夕のとき、星があつてナナツボシが出てなにする。ナナツボシ、なにする。結局、ナナツボシで川を渡って星どうし会う。天の川を渡って、ナナツボシなつて会う。どっちが男がわからんが女がわからんが…男が渡ると思う。会って、ナナツボシになる。天の川を渡って、ナナツボシなる。北斗七星は関係ない。ななめに西の方に出てる。中央からちよつと西によつた。天の川あつて、ナナツボシ。わりあい、あかい。ナナツボシ、天の川にある。7月はいったら西のほう、日が暮れてから」

「ネノホシは北にあるけん、船の位置を調べるとき、それを目標にやる。明治の人、ネノホシと言った。真北に出て、あまり動かない。目標に航行定める。ネボシな。北の大きい星やけんね。ネボシ、ネノホシ」

「網をやるとき、だいたいわかる。網をここでおろす、ここでやったら、と漁師の勘。ネノホシで場所を決める。島とネノホシ、島の山の頂上とネノホシかさなる、網をいれた」

「ホーキボシ、7月から8月、9月よく見えた。ホーキボシ、箒みたいな形して。かたまつてる。星が相当、かたまつてる」

「ミツボシ、たてに3つ並んでいる。ホーキボシは、ミツボシより星ちよつとこまかかった」(話者生年、大正9年)

(3) 山口県防府市野島

スマル(プレアデス星団)が登場する盆踊りのクドキが伝えられていた。

「スマルマンヅク、ハヤヨハナナツ、というのがあるので。ゴジャゴジャとかたまつた何座と言うのでしょうかね、その星のことを、ここの人はスマルと言うのですね。スマルボシ。ここの人はなまつてから、スマルと言うのですね。スマルというのはですね、この島の言葉では、繩船が

縄をはえているときにですね、それを探しあてる小さな錨のような形をしたものなのです。それで縄を探しあてる道具なんです。それになぞらえてるのですね」

「スマルマンゾクハヤヨハナナツ。その星の輝く時間はナナツというか、何時ごろのことでしょうかね、夜中になるのでしょうかね。スマルマンゾクハヤヨハナナツという言葉をつかうのですよね。ここの人たちがつくったクドキではないかと思うのです。テンノヒロイノニスマルボシハゴジョゴジョって言ってね。ウミノヒロイノニエビノコシヤカゴンド。エビは曲がってるからね、それを言うのでしょうかね。海が広いの曲がらんでもよさそうなものに。家の広いのにね、これは島の方でトット(とうさん)とカカア(かあさん)はゴジョゴジョ。夫婦がひとところにかたまっていることを言うのです。正式のクドキではないですけど、合いの手にやるのですよ。独特の自分自分の節」(話者生年、昭和6年)

(4) 山口県大島郡周防大島町日前

ミツボシ(オリオン座三つ星)、ナナツボシ(プレアデス星団)を目標にしていた。スマルという星名は、伝えていなかった。スマルは井戸のつるべが落ちたときに拾うのに用いる道具を意味していた。

「ミツボシ、出てるよね。たてに3つならぶ」

「ナナツボシ、星が小さくならびよった。北斗七星とはちがう。ナナツボシは、ミツボシと違うところから出た。ミツボシ、東。ミツボシより北から出た。ナナツボシ、かたまっている」

「ナナツボシ、ミツボシ、おじいさん、親が言っていた。ナナツボシ、ミツボシ見て何時頃と言った」

(話者生年、昭和3年)

3-5. 四国

香川県、愛媛県において、次のような星名伝承を記録した。

(1) 香川県坂出市岩黒島

スマルさん(プレアデス星団)とミツボシさん(オリオン座三つ星)を目標にしていた。空を見ながら、ミツボシさんがこれくらいまで上がると説明して下さった。

「ミツボシさんが、こっちから上がりだしたら秋になってくる。4時頃、これくらいまで上がってる。ミツボシはちょうど距離はおなじだけあいてから、あんなにきれいに3つ並んでいる星ないわ、ほかに。あんまりよく光る星でないけど。あんなにきちっと並んでる星はない」

「スマルさん、スマルさんいうのは、ちいっちゃん星が、ちょうどかたまってる見えるわな。ごちゃごちゃと見える。スマルいうか、ツマルいうんか、あれが上がりだしたらフクに酔うとか、酔わんとか言いよったな、年寄り、言いよったな。よっぽど気をつけて、煮炊きせんとあたるいうことや。いましめじゃったんだろうな。よう炊けいうことを。小さい星が6つも7つもかたも一とるな、あのかたまりよ

るわな、あの星のほかにはないわな。あれもミツボシさんといっしょでミツボシさんよりもちょっと早よ上がりよるわな。スマルさんは、ミツボシさんより、ちょっと上にある。スマル、ツマル、7つか9つかな。4時頃なったら頭の上かかくまで上がってくる」(話者生年、昭和12年)

(2) 香川県丸亀市広島町小手島

ネノホシ(こぐま座 α 星[北極星])を目標にしていたものの、スマルは名前を聞いただけで見たこともなかった。

「ヨイノミョージョー、ヨナカノミョージョー、アケノミョージョー」

「スマルもあります。見たことない」

「ネノホシ、おやじ、年寄り、ネノホシ言っていた。ネ、キタ。北の空に上がったら、あれネノホシ。動かん。夜、かすんで山が見えんとき、なんべんもある。あれよ一光ととる。あれ、ネノホシやって、走りよったことある」

「エビ漕ぎしていた。ネノホシは、北に光って、よう光ととる星はネノホシ。ネノホシが見えたら、時間かかってもどうにか帰りよった。しまった、いうようなことあるさかいな」(話者生年、昭和5年)

(3) 愛媛県新居浜市垣生

カキアガリボシ(明けの明星)、ネノホシ(こぐま座 α 星[北極星])、スマルさん(プレアデス星団)を目標にしていた。

「カキアガリボシ。上、あがることを、『カキアガリ』って言う。とびぬけて明るい。カキアガリボシ出たけん、何時くらいじゃ」

「ネノホシ、ネは北のこと。ネノホシ、北の、子、丑のネ。北の星。ネノホシを見たら北の方角」

「スマルさん、かたまってる。スマルさん何時じゃ」

(話者生年、昭和7年)

(4) 愛媛県松山市高浜町

スマルさん(プレアデス星団)、フタツボシ(カストルとポルックス)、ミツボシ(オリオン座三つ星)が全て東の空から登場したとき、「秋星がそろった」と表現していた。

「スマルさん、こまい星がごじゃごじゃかたまってる。数えられないほどごじゃごじゃして。スマルという道具とは関係ない。スマルさん出るのがいちばん夜が短い。5月の中(なか)の十日(とおか)。20日のことを中の十日と言う。5月の中の十日、スマルさん出るのがいちばん夜が短い。夜が明ける時分に出る。旧暦5月20日、スマルさん東から上る。夜が明ける時分。スマルさん、10月の中の十日に西に入るんじゃ」

「アキボシ、フタツボシ、ミツボシ、スマルでアキボシ。フタツボシ、ミツボシ、スマルさんと3つとも出たら、アキボシがそろった、と言った。秋になったということ」

「ネノホシいう。いごかん。ネノホシ、こまい星やけんね。

だいたい見て、これが北いうの磁石もって見た」
 「北斗七星、左甚五郎が掘った宝が光ってる」
 「七夕、竹、1本。団子作って備える。竹の枝に札をつ
 りさげて、子どもの願い。スイカもそなえる」
 (話者生年、昭和3年)

(5) 愛媛県松山市津和地島

イチバンボシ(明けの明星)、サンバンボシ(オリオン
 座三つ星)、スマル(プレアデス星団)を目標にしてい
 た。イチバンボシは宵の明星を意味するケースが多い
 が、この場合は朝一番の星、明けの明星を意味した。
 また、サンバンボシは、サンボシがイチバンボシの影
 響を受けて変化したものかもしれない。

「星でよう光るのが。イチバンボシ。東に出よる。この山
 の上に、朝、夜明けにイチバンボシ。あれだけ山の上
 あがったら何時頃だな、と言いよった。イチバンボシが
 のお、毎朝あがる。山の上にあがってくる。よう光る」

「サンバンボシだ、言ったな。サンバンボシは、こうまっ
 すぐ」

「スマルということも聞いたな。星がこう団子になって並
 んでるわけやな。並んどったのお。そんなようけは、なか
 ったのお。4つか5つくらいはあったかのお。うすいうす
 い」(話者生年、昭和2年)

3-6. 九州

福岡県、大分県において、次のような星名伝承を記
 録した。

(1) 福岡県豊前市宇島

ネノホシ(こぐま座 α 星[北極星])とミツボシ(オリオン
 座三つ星)を目標にしていた。

「ネノホシ言ったな。こ(子)。あんまりいごかん、ネノホ
 シ。霧かかるとき、霧は下のほうだけだから、ネノホシ見
 える。オカの山あてにしてたけれど雲がかかたら見え
 ないときある。ネノホシは見える」

「ミツボシはあった。たてに3つ。ミツボシがあがった、何
 時頃だった、と言った」

「星がゆるぐ(揺れる)。星が、えらいキラキラしとるのお、
 沖に行くまい、と言った。星がゆるぐと風ふく。月、沈む
 とき風ふく」(話者生年、大正12年)

(2) 大分県中津市小祝

昭和22年から父親と船に乗って、ネノホシ(こぐま座
 α 星[北極星])、スワル(プレアデス星団)、ミツボシ(オ
 リオン座三つ星)を見る勘を習得した。

「夜、星がないと商売できん。ネノホシ言った。動かん。
 ぜったい、動かん。ネノホシ、動かんいう意味での「ネ」。
 帰るとき、ネノホシあてにして帰らな。曇ってネノホシ見
 えないとどっち行ってよいかわからない。星が見えなけ
 れば波を見てあてにして帰る」

「秋なったら、ミツボシが出てくる。9月から先、秋なつた
 ら出てくる。ミツボシ、並んで、明るく。ミツボシ、並んで

る。いっしょの間隔、いっしょくらいで、3つ星。ミツボシ、
 真東からのぼってくる。スワル、北よりにある。スワル、
 群れてる、星が。スワルサマ」

「金星。ヒノイリノミョージョー、ヨアケノミョージョー」

「風がねえとき、星ちらちらしない。星がちらちらする、
 風があるとき」(話者生年、昭和10年)

(3) 大分県宇佐市四日市町

昔の人はミツボシ(オリオン座三つ星)やナナツボシ
 (プレアデス星団)で時間を知ったことを記憶していた
 が、自分自身は体験をしなかった。

「ミツボシ、ナナツボシ、あがりよった。東から。ナナツボ
 シ、ミツボシの上に。ミツボシ、大きい。ナナツボシ、小
 さい。あまり大きくない。そんなに大きはないけどな。よ
 っぽど曇りのない日しか見えん。ミツボシは星は大きい
 よ。ナナツボシは、あまり大きいない。昔の人はナナツ
 ボシで時間を知ったようだ」(話者生年、大正9年)

(4) 大分県宇佐市安心院町大

大分天文協会の奈須栄一氏、甲斐之彦氏の案内
 で調査を実施した。ナナツボシ(プレアデス星団)の伝
 承が伝えられていた。

「ナナツボシあるけど、ほんとうはムツボシ。ひとつ剣星
 寺にある。その石は取られたと聞いていた。星堂のなか
 にあった。まるい石で。剣星寺に剣がある。剣星寺
 に落ちた。石の上に落ちて、欠けている。石が欠けて
 いる。剣で欠けたという。上から剣が落ちてきて」

「ナナツボシは北斗七星ではない。北斗七星は大きい。
 ナナツボシは、見たところ、6つしか見えない」

「ナナツボシは小さいです。7みたいな形。晴れた日。
 夕方、東のほうにみえる。暗くなったら東のほうに見え
 ます。北斗七星とはちがう。同じ形。北斗七星大きい。
 広さも広い。ナナツボシは小さい。6つしか見えん」

(話者生年、昭和2年)



星堂(大分県宇佐市安心院町大、剣星寺)



剣が落ちて欠けたと伝えられている

4. おわりに

まだまだ記録できていない暮らしと星のかかわりがある。2012年においても先行研究(野尻 1973)(桑原 1963)で記録された星名伝承が失われることなく語り伝えられ、さらには山口県野島の星の歌をはじめ、新たな伝承を記録することができることが明らかになった。

(1) 星の歌

野尻抱影氏著『日本星名辞典』等に掲載されていない新たな伝承を記録することができた。

・山口県防府市野島

星は、海や山や川等と同様に「日常の景観」であった。人間にとって必要な環境としての星は、他の自然環境と別のものでなく連続したものであった。星を歌うとき、星とともに、海を、そして、海の生き物を歌った。「あー、スマルマンゾク、ハヤヨハナナツ。天(てん)の広(ひろ)いのにスマルボシやごじょごじょ。海のひろいのにエビの腰やかごんだ、家のひろいのにトット(とうさん)とカカア(かあさん)がごじょごじょ」

星空のスマル(プレアデス星団)、海の海老、そして、家のなかでごじょごじょと暮らすトットとカカアを別のものとしてでなく連続して捉えて歌った。



・大分県宇佐市安心院町大

プレアデス星団のことをスマル、スバルではなく、ナナツボシと呼んでいた。そして、次のようにナナツボシの歌が伝えられていた。

「マーカセマカセーヨーサー シバーラーケーヤローナ

ー マーカセドッコイセ ヤロターユタモーノーアオヨリ
デキモー トーハリハリヤノーエーリー ナナツボシコ
ソサー ムツコソーゴザーレー カセドッコイセー ヒト
タアー フカミーノ ハ ヤレ ケーンショーウジー トハ
リハリヤノエー」



(2) ナナツボシ

1985年9月、大分県別府市亀川にて次のようなナナツボシの伝承を記録することができた。

「ナナツボシさまはな、ハナ、八つあった。安心院のお寺の坊さんがひとつ祈り落としたという。もとヤツボシやった。八つあったけど、ひとつ祈り落としたから七つになった。八つあったけど、ひとつは安心院の剣星寺にある。ヤツボシ、ヤツボシ、ゆかりはいいわ。今はナナツ、ひとつは安心院の剣星寺」

飯田岳樓氏が祖母から聞いた話では、「七つ星さまは六つこそござれ、一つは深見の竜泉寺」で、安心院の剣星寺ではない。また、八ではなく七であった。(野尻 1973)

2012年の調査では、深見の竜泉寺の伝承を記録する手がかりを得ることができず、安心院の剣星寺においてナナツボシの伝承が伝えられていることが明らかになった。また、安心院においても七であった。

そして、ナナツボシがプレアデス星団を意味するケースを、安心院以外に次の2箇所まで記録することができた。

- ・山口県大島郡周防大島町日前
- ・大分県宇佐市四日市町

即ち、2012年の調査により、瀬戸内海地方において、スバル、スマルのグループに属する星名とともにナナツボシという名前を記録できることが明らかになった。

参考文献

野尻抱影:1973, 日本星名辞典, 東京堂出版
 桑原昭二:1963, 星の和名伝説集, 六月社
 北尾浩一:2011, 大阪市立科学館研究報告2011年, 大阪市立科学館, 45-50